

伊豫國形廻記

石田村	玉之江村	坂元村	猶木村	西泉村	安知生村	氷見組
-----	------	-----	-----	-----	------	-----

			二七九	和書門
		一	一四七	
冊架函號類	二	三	七	

35

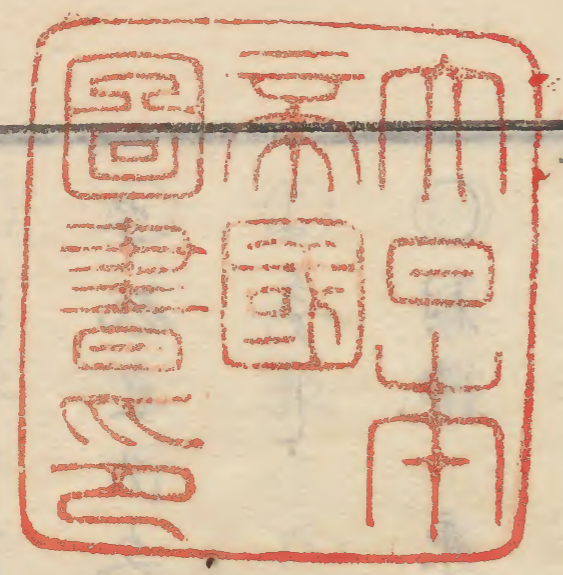
庫文閣内			和書
玉之江	坂元		
三架	四		

内閣文庫	
番號	和 27947
冊數	4 (1)
函號	176 35

真四



垂



明治十三年購求

安知生村

新居郡・神戸郷・氷見組

村名の義未詳。村内、石湯八幡の社あり。安産
を守り、それが故に村の名とすと云傳れども
安知生の文字義を不敏に似たり。石湯の予不
し多し。

○村境 東ハ海之内村。西ハ西田分。南モ海之
内村。北ハ中西村。但東西凡十町。南北凡六町半。

○田畑高 五百八拾五石五斗二升五合

○家数 七拾八軒

○人数 凡二百七拾五人

○枝在所 飯治分

○用水 十分あり方

○御曹所 三ヶ所。難不詳し。

○陸奥と稱する地あり。その庄屋長左衛門

宅より成亥の才より一柳殿時代教生小

憩ケイの亭字多し地ありとゆふ

○名物 真瓦

○石湯八幡

神主洲之内村

高橋相模

本社 二尺

二尺六寸

拝殿

二間一尺

鳥居

一基

日本紀

第二十卷

齋明天皇

第三十八代

の條より七年春

正月庚戌御船泊于伊豫、藝田津、石湯、行宮

熱田津此

云 陀ト 豆ト 你ニ 枳キ

とあり、藝田津ハ之の西田之とゆふ

保國寺の縁起辨之

西田分の條下に

いよく然ら

バ世祠、高田分の畧をく、四五町の内より阿れば

石湯と云も、日本紀より石の石湯ある然

是古、松山、及後温泉郡の内にも同名の地あり

と受けハ、世、如とハ、存シ宜如、穀カキし、粒リをカキて

然るべし、石湯八幡宮の事ハ、旧史より見く、以後

一勅請したるとの形るべし然るに世祠^{モト}向ハ
 大社よて互しと云々も此邊の地名を八幡座
 敷と稱く又神子座敷と稱ふる地も近所よ阿
 連バ世時の権極を懸^{オモヒヤル}像すべし天正の兵火よ
 焼れ赤地とありしを後世小祠を建僅よ名号
 を存するのみと村の古老お語りぬ

○荒神社

神主^{ハシ}海々内村
 高橋お摸

○萬頃寺

妙華山十輪院古義真言宗京都
 仁和寺末境内東西北三十三間南
 北二十二間檀家凡三百十七軒

本尊
 地藏菩薩

本堂 五間四方

玄関 二間四間

庫裡 三間七間

釣鐘堂 一丈四方

門 二間一間半

鎮守天神小祠

千町山村よ妙義山誓願寺とりよち互しび位
 僧親明と云もの代よそれを廢し當村よ一
 寺を興し方頃と改山号ハ千町よての候を用

古世興廢の時代記録多しハ多し難し撰取
の檀越七十餘家ハ皆當寺ニ屬する之

○

庄在 長尾門

系譜を失ひしれ長を副本ニ写したるも此取
述ハ世次ハ大概ニ知る之久しく續く家
あり長を大始をいふるをば姑く盡べし永遠
二壬戌の系世家の比久尾惠久といふものよ

り保國寺ハ田地一畝寄達あり今をさる

事四百六十餘年之

寄達狀保國寺ニ存す其写ハ長尾門ガ家ニあり

又其家記を考ると菅善兵衛と云もの身の長
六尺重六十貫目を擧ぐ武藝もまさりよく短
刀をつまふを帯せる大小を他家ニ傳ふ云正
陣實記澄水記等も其名出ず謂藝妙礼ノ難

波江藤太史

その更の目的ハ長尾門ガ先祖之系するハ西田方の保下ニ出

と世に武功をあらし世し事足くしりそ未業
 のちよ氏留又落そ庄屋役の事ハ世上りてハ
 御指地あよりの事と称れ在そ家よてハ事
 控ありはと申す家よ私記ありといは在庄屋
 役の事をば更よ志るさびるを以て然るに陸
 持地あよりの檢地帳二冊を藏む寛文六
回七 安知
 生村庄屋次吾津門及と云當阿れ在世庄屋の

世代の内よ次吾津門と稱せしもの如し御進
 左外よ庄屋役勤しと云家無れば此次吾津門
 と云も此家の主人よて次吾津門とハ替時の
 稱呼よて後改名せり也。世代の内よハ足く
 ざり然れそハ鬼も阿れそ在毫の邊深田よて
 用水の泉牆外よ流れ大小の鴨兔多く聚り且
 其塚よトク
アツホクサニ 鏡眼あるを以 源姓公大惠公直日公

志ばく清徹なり有りて。法簡を試らる。天保の
清入りも亦然り。

○

庄在限在 若五后岩橋

その庄在長左衛門が父之いけりけり時より
讀書を好み因長村の平太吉本氏と云儒者より
ひ言欲派の道学を受承左ハ大洲の城主より
禮遇厚く度々迎られて之府より申くよ
平太大洲より

用られし事。因長
村の條下よ出 五后岩橋も毎ソテに随地す長ず

るよ及之。園齋学よ不安ニ京郊よ遊ひて皆川文
藏。佐野少進書を師と次少進薦めて菅家内ニエク

の都講とす。市医所山名修朝。五后岩橋と同時

がガ法ホシをシ言コト過大納言胤長ハも五后岩橋をよ

く思シ々シ亮コトするよ及て。遺稿を分ワケくス。自筆竹亭夏月

の侍。花唐 難掌川瀬圖書近友岩が贈状目録

等あり。俊長のより五郎と海の父は讓平が六十

の生辰を祝ひて壽詩を詠ふの俊長の孫は讓平の

名ハ長吉傳ハ讓平ハ臣在名ハ皆傳くて其家にあり。五郎は其

傍のち家に歸り。庄屋に役を勤る事二十餘年。臣

括して津城下町にあり。教授す。文政十二丑八

月十三日に去る。通誌 仰付

安知生村庄屋長吉傳の親
五郎は其傍

年来志篤儒学致修業以恒お達以依る其方

一代限苗字帯刀に仕ぬ 所免三人扶持に下

並に折る学官に下に仕出仕用筋に相勤る

五郎は其傍にありき時放達して名教に不拘是

を以世の傍を好しり。然るに其親に事て孝。母の

喪に遭ふ居喪私書の著述あり。文章を好み。

皇朝の学もも其大略に通ず。田畝の中より抄

る人出る事稀之因て表して周敷村の平太土
右村の信之等が如く、その編集の内に入

○長たぬ門が家持傳る品

菅公の像一幅 希代の古画之何人の点かけを不

鸞鳥一幅 是も古色深け
連た款識取し

林道春先生と書一幅

酬宗先生自駿府寄

紙衣副以詩

燈前裁竹同夜將闌

两地風霜相喜共安

錦繡猪衣吾一視

只、怜世上外邊寒

羅山子

戊寅禾子冬

百姓 幸助

○

此者の先祖得永化雲軒と云もの字外木塚の
石川氏よ仕く拵くと云幸助が家石川の嗣息
虎竹と申し、人の書管を蔵心度作去妙よ道
れ身を長曾我弟よ托し、名を改めて頭字よ汝の
字を付下ハ右傍のり左傍のり助り共海り知
ま難く只石汝と計り尺くく龍押を拵く書

箱二通と色紙の村名二十をのり書くもの
 一紙と世孝助が家よ送れり二通の虫箱ハ皆
 天正十七年二月二日とあり産紙よ認られ
 去おと足る其村名の内湊之内その内と内横
 堀その横菟山その兔野山等ハ文字よ古今
 異同あるを見出し幸助が家よハ甚矣し

西泉村

新居郡・花郷・永見組

村名の義未審泉阿れ在東よ阿り福よは世と
 云

○坂元村庄在四段長徳り俤次郎在徳門と云
 もの元和年中当村よ出土地を築くと云予黒
 川磯之魚序苗古在回んが持る旧記よ見くら
 り然れ世當村庄在の池録よ村ハ監相極在代

正保四亥奈海取立と阿れば元和は寢祭と
ごまて村名ハ未立しぬべし又松木村庄後
傳る古紙に松木村ハ氷見村より分進西泉村
ハ松木村の内の本畑兼原地等の内を分け西
泉村の在る百姓屋敷とあると尺くくり田地
ハ平沼を築き止りたる之と云又其市分ト寛
文二寅奈氷尺村の内ハ當村分りたる之と是

亦松木村庄屋の日記と石岡八幡社の日記等
より尺くくり當村新村ありたるを知得し

- 村境 東ハ西田分・涉之内村・西ハ氷見村・松
木村南ハ黒瀨山・北ハ波瑠・但東西凡松武町南
水凡三松町
- 田畑高 九百六拾八石九斗壹升九合
- 家数 百六拾六軒

○人数 凡六百八拾貳人

○枚在所 野々市

○用水 不足如し

○御普請所 大小十六ヶ所

○市林 壹ヶ所

○丹氏部 地、近江の士にて、高嶺へ籠りたる人と思ハるれ在。奉歴惟よ分り難し。

の墓 东谷と云ぬの下。注置大及の南より河り。地墓

八百姓傳に陸口が原友由よ籠る。 天正十二年の乱に藝州の士

吹上六郎と云ふのと戦ひ、世に如くして居て遠て死

すといふ事、河野軍記、澄水記、天正陣實記等に

見く、より墓ハ小石少し、積上二尺許の自然石

を建、文字如し、右左に同じ位の石冢二あり、其

冢其の從死せるを葬れる之、小門あり、板牆あり

り、注置の友由よ當るを以、強造の人、敬ひ悼り

く路下よ又小運ケイを付ツそれを通スりて本道ソクを涉ル
その少し

實 岳 良 貞 居士

了空院殿見山常性大居士

忠 岳 良 儀 居士

吾の通りの率ソク後波ハを二ニ百五十ハチ年ネン忌ヒよよ遠トウ孫ソク
周シユ五ゴ節セツと云クもも此コノより速ハヤくクるルがガ是コノより固カタむム

が家ハ福武村よ阿アり民間よ零落レイラクす實岳忠岳
ハ從ス死シの兩ニ士シ之ノ墓傍マツナリの民家タカラよよてて系ケイ詣キ人ニのノ為ニ
よ線セン香コウを賣ウるル鉄テツよよてて小コく義表ギヒョウをヲ仰オホりテ繩ヒツよよ貫クワン
たタるルものノ數カズをヲ志シすル墓樹マツよよ挂カケくクるルよよてて禱トク法ホウ
のノとト比ヒをヲ應オウをヲ知チべベしシ傍ナリよよ馬塚ウマヅカ阿アりリ大小ダイショウ
のノ鳥トリをヲ手テ向ムくクるルハ馬ウマのノ疾ハヤ病ヤミをヲ祈イノしシ之ノ脩シユ竹チク老ラウ
杉シ墓ボ域イキをヲ覆フひヒ蔓マン葛カ蒼ソウ蘚セン燈トウ籠ロウをヲ侵ラカすス當トウ村ムラ五イ塚ツカ

の内蔵古色ありもれと次
 ○越智信濃守の塚 と云もの東谷の百姓宣
 七モトヤブ持藪の内より信濃守の事を土人より言
 へた知もの如し澄水記河内軍記等より黒岩より
 越智信濃守と云文あり黒岩ハ地名ありべし
 然れ在る地何處の處といふ事を不知河野軍
 記等より姓名見あるを以考れば天正の乱より遺



たふ人よて世邊より戦死せるあかへし

○野く市と云ぬあり元ハ氷見村の内之しり

寛文二寅桑高村へ分枝在取とぬと家数五十

町程あり世ぬの野原より旅者四方より寄合て

季冬より市を立因て惣く市と云とりりを堅

く市と出ハ誤ある處し

○石川織部塚と云もの野く市畑の中より

り世人の事由控より知難し然れ共氷見村覺法

寺の由控記と云ものを冥するより夢長年中石

川織部豊後國古伯此地より移り何れの処より移ると云

不書覺法寺を建立元和年中没却り市より葬と

あり塚周二間四方小き石佛を建

○金子備後寺の塚惣く市在取の南の畑中

よりあり世人金子村の塚主よて去る歴回村の

石川織部塚



條下よ出す如く墓ハ金子城設の下よ有り之
 此地よ古塚阿る所以ハ古記を考るよ藝物ノ
 大歌を樂人乃近郷ノ地頭等洲之内氷見等ノ
 若^{トリテ}集り陣ノ尾里城^{サトシロ}堅く市邊よて苦戦よ及
 ひ^{カバチ}屍を曠原^{ウツゲン}よ黒し^{サシ}骨を此荒墳^{ウツブン}よ止^トぐる有歌
 漁し然^シして壺子村ノ墓碑ハ居城ノ下ノ後世
 設け搦^ニぐる其ノ死^シ之ノ處ノ塚ハ周方九尺を



首塚



金子備後守塚

あり。近世重子氏の末孫等小祠を建てあれを
祀る。

○吾備後守の塚より十四五間東より石積阿比
檮木生ひ首塚とも亦千人塚とも呼習ハシ。一
堆方二十尺ばかりのりよ築阿比石佛を安置した
る処有り是ハ天正の戦よ小平川隆景友よて
首を突搦しそれを埋くる塚之と云。此塚より市

の在所より久しく住て今組段を勤指する為平が

先祖

年代名称
詳形らば

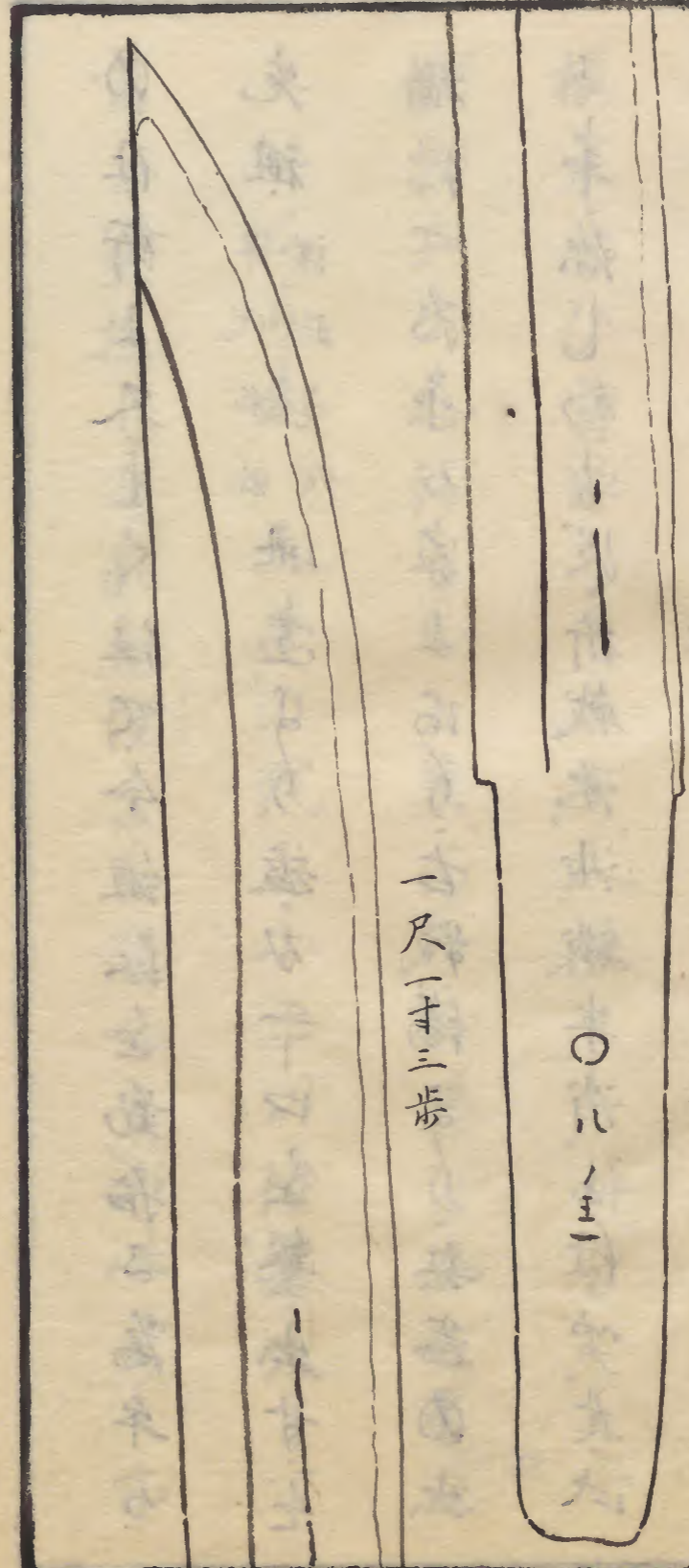
此塚より短刀一口を鑿出す

猶傳て為平が家より古戦場より兵器ゆ出
る事殊しかくは折戦沈沙鐵半消とは嘆た此
刀を足るよ形跡消滅せるものよあはる精練
の良器土を造を朽する事不能水あれを腐
しむる事をふね死又ハ埋没よりいすよ年数

在_レ不_レ經_レうち_レの_レ鑿_レ出_レせる_レ丸_レ中_レ心_レの_レ銘_レの_レ痕_レ見_レ也
 是_レ其_レ字_レ形_レハ_レ慥_レニ_レ分_レり_レ難_レシ

三寸六歩

一尺一寸三歩



○一宮神社 荒神社

以上二祠神主氷見村

玉井大和

一、本若ハ當村の氏神_ニシテ、海_ニ内_ニ村_ニ新宮神主
 の持_テ之_レし_レり、氷見村石岡社の神主_ト神_ノ願_ノ争_ノの
 事_ヲ起_リ、序_ニ當_ニ代_ニより_テ海_ニ裁_レ許_レあり_テ石_ノ云_レ氏
 子_ノ之_レり_ニ當_ニ社_ニハ_レ編_レ結_レ神_ト成_レ、石_ノ云_レの_レ不_レ司_レニ_レ極
 する

○大師堂 地藏堂

以上二堂

村持

○大崎堂の次孫堂 庄屋 孫化

天保八酉桑庄屋没記 佐付同十亥桑他不知
舎と苗字帯刀清免作付らる

○當村元の庄屋と奉元和年中坂元村庄屋四
郎兵衛が俸次右左衛門と云もの當村より
此家より代々庄屋没を勤仕しが市と懸と云
ものの代より没儀を辭しそ没没其く市の

喜三右衛門一は 佐付喜三右衛門次市平桑
平と三代勤之史よりその孫化蒙之吾と通數
度入替りこれバ日記を失ひ右庄屋代
殿様清立桑等くる分明あり

○ 組頭 為平

此者の先祖野々市原を築き富とすいつの頃
より五ヶ人短刀一口を境おすまゝの首塚

の條下よ委く出次を程傳へる平ら家より
 寛永五年子十二月 君公序磨柱の序序腰を
 拭させらる庭よて熾カキに焚タキ生ヒし奉りければ重
 氣を忘れたりと陸悦ありて銀錢五文以下並
 之永樂通寶之其内三文之も傳へ持せり享保
 十四百奉よは六月七日十月九日十一月六日四
 度序立奉あり十月九日よ八葉山の石拵イサ方序

吾國サシありしと云る百年前上下の陸親厚く地天
 の通文五周易の道よ合カヒしるを想像し奉べし
 度々の序立奉献上物は下物あり略之を後家
 衰へて八葉山の形のを少く造る天保六の
 御入部よ八瓢ヒョウ葉ヤを奉献のみ豈之れ有言記
 ○ 百姓 彦右衛門
 舊き家よて西京氏之後京乘清氏系圖之次第

と題して巻帙一軸を持傳ふ末に文治四年九月日吾之子孫和泉吉政とあり文中に義經八島原先陣之時信俊中孫渡中信俊本に在り者よて中其子信香潮の子と作鎌倉及より江頼タケノ言録に不熊法切獲江故に刻於木ハ紀伊國友成寺立七十五日に孫著法用立中ハ病系ハ泉妙に在在夢にも不存然多改第ハ之形どの文言

有り然其書体紙色等文治年中の物に阿らば其後ハ其大略を抄すハ只年号の古きと添出たるとありて此者の家ハ久しく衰へし傳ふるとを以書載るのみ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

楯木村

新居郡・花郷・氷見組

村名の義分昭あはれ或ハ楯木昔あらの木の
大樹如ど首しより名付たる氷見村の内よ
り當村と坂元村多れしるハ氷見村の條下よ
出たりそ多れしる所ハ楯木村の百姓弥
呂橋森三戸四戸号漱次郎た水門等が正保二
酉年の秋虫よ足くたりそ秋書坂元村の庄屋

毎化が家よりあり。吾正保二年永見村の内より
言式百八拾六石式斗四升四合を分て。松本坂
元とし。此二ヶ所を二村よりは五分二村より分し
ハ寛文元年之を後新言まし。くその如く。今は
故よりと見ゆ。

○村境 東ハ坂元村。西ハ西泉村。北ハ市
分。南ハ坂元村。北ハ西泉村。但東西凡七町南北

凡三町半。

○田畑高 式百六石七斗三升式合

○家数 三十六軒

○人数 凡百三十七人

○枝左不 廣畠 ヒロハタケ

○用水 溜池一ヶ所。泉六ヶ所。水不足。貯き方

○御普請所 三ヶ所。穀不左し。

○姥が橋 此橋當村の西に置道に架る元ハ
古橋より有しが今ハ石橋と成石鉄山系詣東
より來るもの信此橋の根の道より南へ入氷
見村長谷を以て姥が橋の事保玉古縁起には
たの如く凡くより橋嶋等の事古縁起には
の説と竟向古縁起の終を及よ出す
文德實録曰先是郡下橋里有孤獨姥号橋嶋云

々郡下者神野郡也。姫所居塾田津之往還所於
今有名姥橋即彼姥之古跡也。此所号橋里今之
安知生古川上砂之間号橋嶋是其證也。

○荒神社

神主氷見村

玉井大和

○阿弥陀堂

村持

地内今井玄蕃頭の墓と云傳ふる古塚あり
此玄蕃頭何人ある事を不知塚上小祠を建

周敷郡乾蓮寺村長世村の高庄庭時阿の末
り推すと云そ末孫あり也

○

高庄庭
村平

此者の家陸持地ありの庄庭よて當村の家
基之と云正保四亥癸以後の免状花拍取刻符
帳等十餘通を持陸持地あり。拍之先祖ハ早
川の城主よて秦備ありと稱せしと云早川々

何れの地と云るを志くは然ども河野軍記ハ
早川ハ秦備ありと云孫兵部雅波仁内藏助白石
若狭守丹氏迄久ハ甚五戸。部合六百餘騎之と
云文見く秦氏代々造云筆記集と云そのよも
天正十二乙酉七月當如大ハ此れ高持始數々
所一曰高城高祖秦備ありの古城早川も高と
云事見くたり是等を見世考ると此色ハの地

名とは荒ふかの造云筆記と云ものゝ扱ヨリ之考
るゝ落城の時其家室ガイニ孩ニ児を抱き家来と合て
九人他國に流浪し乱轉りて後友に歸り武門
を變て農事を勤め當村を墾ヒラケ闢し代々庄臣役
を勤む因て正保次ヨリの免状書數通を發む
後進ミり困窮し村平ニあり一家を保つるを
も不レ得古帳數ハ之の庄臣村之助
同族に譲

り之ヲハ江戶ニもき人の書子と故ニは上田
次吉場と名あり藩邸の奉仕と故と吹ノ憐ニし

氷見村吉祥寺ニ重寶記と云ものあり之ノ内ニ子安親世音ハ秦傷ヲ書版守ニ本尊ニ子孫持傳當院ハ納む曆應院殿月山保休大居士とあり傷ヲ書ノ法名ありニ置しニ州人ニ此迎ニ意ノ地ノ段ニ之有しノの一ニ證トすニ置しニ友ニ友ニ贅ト以

○ 庄臣村之助

天保十亥桑庄臣役正 佐付流抹地ありの

猶林村

江

免状畝言帳等・前庄西村平家より譲り傳へ・數
く取持すま古紙の内より享保九年の宋代更取
書と云もの有り・一石より付代銀三拾九文附之
今の通用鈔と云ものより並し・五拾文五附し當
る・此時代米價の鈔ありし事を知べし

坂元村

新居郡・花郷・氷見組

氷見村の吉祥寺・昔は當村の上の山より有り・村
名の坂元と云ハ山上より有りし時寺より呼
し名号之といふる・吉祥寺の古記より見たり
然して氷見村の内より・苗村と・櫻木村トランキ多れし
る・氷見村の條下より出を多きと云ふ取次ハ坂サカ楯タテ
両村の百姓・四段号揚次郎左衛門・跡名・勝・在・三

坂元村

廓等が正保二年春の秋書より見たりを秋書

庄正保二年秋書より見たりを秋書

正保二年秋書より見たりを秋書

石武斗四升四合を分る坂元榎木とし此二

ヶ取を二村すは不分明二村より分る寛文元年

之を後秋書より見たりを秋書

○村境 東ハ西泉村西ハ氷見村南ハ黒瀬山

北ハ楢木村但東西凡七町南ハ凡十三町

○田畑言 武百三拾四石五升六合

○家数 五拾四軒

○人数 凡武百十一人

○枝在所 北山

○用水 溜池有り溪水を古交れ古少し不足

ある方

○ 津菅渡所 三ヶ所

○ 津林 一ヶ所

○ 津藪 一ヶ所

○ 當村の上よ、城跡と云傳ふ山あり、城主の名
不明、此城を、友原の城と云しと、黒瀬山よて
ハ中世、當村よてハ知、もの郡し、城跡より追
き、邊りよ、藤樹あり、そ、石を、友原と云と、り、り

友原の城とは、是を以、稱、す、也。

○ 吉祥寺藪 南北百貳拾間、東西六十間あり。

田ハ大小の竹甚、茂り、楮、鹿の、藪、多く、此、藪、よ、聚、
若、より、津、村、度、く、あり、後、世、村、を、伐、こ、との、甚、し
けれ、バ、年、を、追、て、疎、よ、あり、之、ハ、毛、族、も、少、く、天
保、の、時、持、も、津、藪、不、多、藪、より、數、町、下、よ、津、立
橋、あり、享、保、の、度、の、津、立、場、ハ、之、の、邊、と、す、西、



御立場

坂元村

四



吉祥寺藪

坂元村

三

丸と云知とよあり此丸丸色と大池あり。枯麻
を此池へ造こみ取ると云傳ふを多りし
を知べし。氷見村の吉祥寺。向ハ此藪の地と阿
りし。天正の無火と燒走。その知く後とると
かのちの縁起と見く。とりの藪の名とも合すれ
バ。然るが。池し。澄水池と。吉祥寺の上と。生
寺が。澤と云知あり。ちあ。王し。故べし。今土人よ

言へ。世。知。もの。取。し。此。寺。も。焼。れ。と。る。り。世。阿。と
り。と。鐘。撞。堂。大。門。あ。ど。り。と。地。名。存。す。

○天神社 住吉社 山神社

以上三祠神主氷見村

玉井大和

天神社の後と。楠の大木あり。周圍三丈五尺。土
より三尺。斗り上。よ。て。二。膝。よ。分。る。元。二。本。の。合
く。一。本。よ。故。く。と。板。も。も。尺。色。枝。伸。ひ。式。指。留。四

方より蔓る。殊しき大樹之

○ 観音堂 庄在 村持

○ 修験 庄在 大福院

○ 庄在 糸化

小松原大川の里の上より、ツルギ 剣山と云古城跡あり

城主黒川氏天正十三年より、ロキ 山を築と其子亀

五丸と云しもの家来五七輩と、ト 濱州より逃る慶長

年中當所を修り、藤堂和泉守殿の代友、濱表孫

右御門より清ひく、コニハキ 世に望みす 正保二年の秋

龜五丸後より四戸を傍と改之れより代々當村

より位し、庄在役を勤む、正徳享保年及ひて保

の 所入部より派立あり、田記多く持居之れ

古焼失し、今存在する此より正保二年の秋書より

りして、免札田畠改帳等、法推地以前の毛の十

條通を不持は當村及び西泉村より尾川氏の
の甚多し皆世家の枝族之

山内入格と出立を以て山内家と稱す
山内入格と出立を以て山内家と稱す
山内入格と出立を以て山内家と稱す
山内入格と出立を以て山内家と稱す
山内入格と出立を以て山内家と稱す

玉之江村

周敷郡・井出郷・氷見組

當村を玉之江と云ふ説を聞ども詳ならず私

に考ふるに世に村衆多し六七十間あり或三十間

之の泉八ヶ所あり東宮泉・東之、百、泉・東之、下、
泉・西、濃、古、北、泉、馬、淵、泉、二

ヶ所、新、池、
泉、二、ヶ、所、八ヶ所あり當村及び小松原に在泉

村等の稲田より澆ぎ穀を生ず玉といふは昔

を玉の松と云ふ如く河の稱するの詞より清

く海に之田地を^{ツルホ}澄すより玉之江村と名付し
る。昔ハ玉之井村と云。

○當村昔ハ勝り大由よて奉整りりれば分
村す之の小松原の新屋敷村今在泉村等是也
り。御當代よりりて後モ言ハる八十勝石の
内南水より庄屋二軒ありしが百年あより
一^ニ園^ニより新造庄屋一軒と改昔の庄屋跡跡隠し

古帳傳りてされバ一處より改し時代年月等詳
形^ニ然

○村境 東ハ小松原新屋敷村西ハ石田村南
モ新屋敷村水ハ小松原今在泉村

○田畑言 八百八拾八石八斗五升三合

○家数 八十九軒

○人数 凡之百九拾五人

○用水 十合ふり方

○清舊法所 數十ヶ不難ふし

神主小松 飲

○東宮大明神

澳蘇日向古

所祀神二座

伊奘諾尊

伊奘冊尊

本社 一五間尺

拝殿 二間三間

神主

○東宮小祠

右同人

○荒神 上天神 下天神

以上三祠

正徳寺攝

○正徳寺

玉光山・禪宗・臨濟派・京都東福寺末・檀家百軒餘・境内東西十五間・南北十間

本尊

觀世音

本堂 三間六間

庫裡 三間五間

薬師堂 二間四方

門

末菴 觀音堂

在

市次

祖父の代より庄屋役を勤む親文左衛門三保
六未六月孝仍法養あり所文云如左

一 銀貳枚

おとむ村庄屋

文左衛門

数年没後出精且益々有親に孝心に能事し
母夫先達而致病死に孝父為右衛門白夫不
懈存養家内一統睦友お善村内難做人左一
助故之養も至而深切之取汁也以恒令達

所産奇特之事に於て思召山依之法銀法
下至乃一代限苗字帯刀に故所免之

六月十三日

天保の度所立寄あり家富るを以 所成産友
立派に經營す

○

百姓

定右衛門

安藤貞徳守の末葉之と云英徳守のあり人

五之五寸

みやのり中と考ふる所然し其墓碣ハ後世子孫より
り望み作りたるものと見く古色阿るものよ
はあゝざれども宇岳院殿岫堂高嶙居士左根
よ元亨三癸亥四月廿三日吾よ安藤氏大祖也
と阿り其傍よ古碑の半残りて石性つき手よ
く摩^{ナツ}連ハぼろくかけ^{クダル}碎るもの阿りあれ^{ヒト}四の
碑碣あるべし元亨ハ後醍醐帝の法時よて

今を距^{ナレ}る五百十餘年之此宜古海門家よ白鞘
の太刀一口を藏む長貳尺七寸三歩銘則房と
あり美濃守の佩^ウたる之と云古物ある處く見
也
○ 百姓 又四郎
先祖を日野中務といひしと云本家ハ断絶し
又四郎ハ其別家之志賀瑞翁の画る布袋拭袖

五
七
江
村

一條之文行

銀^横為夏眼晴有思

不列志却舞飛

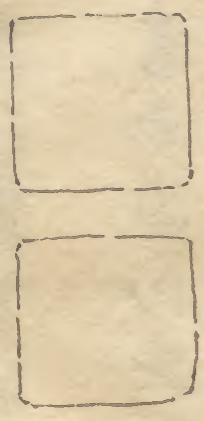
丁^上銀
印^下為

地^上理^中人^下

復^上遊^中

百四十八歲

為^上為^中為^下



五
七
江
村

六

一幅を蔵む賛も有り百四十八歳瑞翁推由と
志るに書画の巧拙ハ姑く置て不偏年壽高し
しる世教所の如んハ希代の老手筆之

○公儀孝義録の寫 孝行者添助

添助は因市郡あり仁村乃百姓ありもとより
田畑毛持事日取奉公とく日をも分ちて人に
つりく已り暇乃日は宛里地を耕し文は日雇

ひの業をいとあきて一人の母を養ひり母
を七十にあまりて年次乃病ふ目さく志ぬぬ
連とり此奉公宣むる時毛必母ふ伺ひく已り
んり叶りぬくもりふむ祐し修さくゆき
つりく然ふ出れを慈母暇をあひ夕ふ歸進ハ
食相乃多少と至起臥のさすにりくまきく
ちく自業にとひまきく所事母よ海をえて已り

その日此仕業あとおほくと語りきりきまこれ
 許よく明日も来るへしあとおきととまき
 り〜〜母り伺ひ事これむ祿あをすのせけ
 る卵ふ出て珍〜り貯るものを貰く必母く
 乃家法〜あし家の内此もれもつ祿にあ
 きものをた〜多ひぬきと母母はとり〜徳ひ
 て〜〜徳を急め軽夕此食扱ともとよ〜業

を〜〜母に先きあくのそぬふるあ〜山語り
 薪あ〜と〜して〜〜のき返きする時七あふ
 しさほ母もてあし素子を毛つ祿よいす〜め
 て志りあき〜先きを急ぎ〜成防へき衾もあ
 り連衣を煖め〜母ふあせ時よさむけに扱
 衣已り衣を脱〜母れ〜〜加〜あ〜〜多ふ
 さ〜めり一人の婦あ〜人徒あ〜ありに

ふり家極めく養によ痛さく多くと福よ添助
を力ふあして志をく成里しりはよる津親の
みくりい多ちりあ此殊よ扱くる事阿達たし
此ひやりにりひあく事母に志くしめ次を此
り娘乃あやまちあて妻のいましめぬる時毛
母此んをい多思んる後思ひをか里く云葉あ
らくふりまし免了あくとたふんをそくりれあ

あも又りふむ手をちりて海ぬ屋りり扱ひり
里或時妻の川邊よ出て菜をつまゆを添助
赤んごゆり卵に出あんよ小稚きものをあ母
ろ我扱ひあふらぬ母をよ免やそくるとあ
は家乃右日の内よ一きひものを食し又は人
ふ扱あふてもあ里あんよる川母此旁あつる
んるをのそあてとく卵面乃事あうまくてい

ろひそと我い母し免り常に母此目志おし
事を歎きあふ病の呪あとするも此五とし笑
けた遠起をき成いの母をすく免く健ひき
ふり母と老乃病あれはい自へきふあははと
てうけ到りぬをいつり母くもものく忍え己
起ぬひあはいのをありり嬉しりるへきあ
あふあもふきくめくともあへり到るくせ本

うきんとりくる病の病をれて己も母毛お娘
し弟るり母此病ハ軽く己ハ到るはるりり
きて四五日ものりハ拍液もきえくくを内
しかと母よ版きめん事ををかりて我と
く了控くく母も免笑し免さりしとてものく
ふをとしてきりせしりハ母も泣助り食する
事を悦びくかしは拍をもくひけるとあんか

る事とも版主にゆめろく宝曆九年十二月米を
興て養員しき

○ 稜多家数三十軒

○ 人数百四十三人

石田村

周敷郡・吉田郷・氷見組

當村を石田と呼ども良田のまてコウカク碓イシ碓シの地

ハ忍くす若ハよりらざりしを追くよ石田と

塙のけ美田とは故コトなるものよや小松飲の廣

に村田キトハ當村の月之しり多ちて二とは故コト

りそ時代詳あり然と云

○ 村境 東ハ小松飲今在家村廣江村西ハ田

領吉田村南八五之江村北小松飲北條村但
東西凡十五町半南北凡七町

○田畑高千八拾六石六斗二升四合

○家數百十を軒

○人數凡五百五人

○枝在所新出本松寺

○用水泉十二ヶ所あり其内一瓢築池と

云ハ志夫之形の似たるを以て名く新く用ゐる

山ノ尾もれども旱魃^{ハチ}は水減し碓^{ニツグ}春もしく

ハ桔^{ハチツル}操を以て稲田ノ劍^{ハチ}取農民勞苦あり奉之

○所菅渡所 数ヶ所あり難所ありし

○荒神社 ^{ニヶ所} 天皇社 蛭子社 山神社

天神社

○南村氏神ハ小松飲吉田村の教使ハ幡を大

祭の神とし、同村圍園クラミンの社を小祭の神とす當
村内の小祠ハ大智寺及び修強大光院の攝と
て、教後嘗園の祀直ハこれト辨らば

○大智寺 光明山・禅宗・臨濟・京都・東福
寺末・檀一家凡百五十軒・境内東

本尊
阿弥陀如来

本堂 二間四方 持佛堂 二間半四間

庫裡 二間半六間 地藏堂 二間三間 門 一間二間

○廢本性寺 當國越智郡ト武田迎江寺ト云
し人阿利天正の礼ト討死すを法溢本性院ト
云を承て寺の名トし子孫の者當村ト尾院を
建後十ハ兵火ト燒れて廢する寺趾をトハ尾の内
ト云又供養の本ともいふ
○間浮提金の佛像 百姓秩吾湯ハの親佐深
松ト云もの亮政十年歳本性寺畑ト仏像一尊

石田村

を堀出す長一寸四歩不重有り。其次松山院の
田村三郎吉よ。つゞく律僧有り。けれは法
て其鑑定を請ふよ。是ハ虚を花菩薩の像よて
地金ハ閻浮提金之と答ふ。因て依弥松の家信
仰し。ふき龜子よ入れ。傳てその鉄吾忠門よ至
る。合類節用よ。観音經の疏を引て。閻浮檀金。聚
過紫磨金色。千万倍と有り。閻浮提金も。其類ふ

る。此又ハ同物。此律師の鑑定の如く。りよく此
金閻浮^ニ提^フあり。バ。識よ十藝すべし。とハ赤銅の如
く。黒みく。本を尺くす。如何とも評し。鑑きもの
之。此るもし都會よ。於。於。於。バ。不謂山。海。あど云
是の據りて。事大強よ。もて。ち。也。す。鑑。け。れ。た。近
々。も。も。知。り。つ。る。もの。如。し。村。野。の。英。風。佛。よ。淫
せ。ざる。を。知。鑑。し。

○修驗

大光院

○同

宝性院

○同

勝全

○同

庄屋 伴兵衛

當村貧民多く、村借用重り、先年の庄屋換實ふ

カクジツ
ギツ
テイ

らざるものも多くて、あゝ引負苦も出来お積

難ぬ、いよく村の傷とはぬける、於是當時の伴

出務の親も亦伴出務と云て、永見村の組改と

りしを奉て庄屋とし、當村を治し、急たりしが

伴出務、組改等とお謀りて、村の言借を多くし

濟し、兼の事を深切に世話し、一村皆借よぬ、高

姓皆能、帰彼致しりと云を以文化八年未二月

濟称登あり、伴出務及び組頭、後改定、千五席等

へも米を込下、そハいよく能、村とはぬ、と云、天

保六年所立家あり

○

組頭

惣左海門

徳増氏より古きより孫孫相續すその小松南
川村言賀茂の神をいづその國よりり執務せ
し時その惣左海門が祖先の家より高しなる家
より法鏡座の記と云傳く石二今より庭あり造
る又古き抽の木あり是をも阿がめて抽の木

根キと稱ふ故ありする家致べし又馬塚と云も屋
敷内より神を騎イなりし馬の鬘カシなるを埋
めし詔之と云此神後より玉々仁村を在る村南
川村小松城下町新屋敷村等五ヶ所の氏神と
仰ぎ奉る徳増家多れて今ハ十二軒あり舊村
氏神ハ吉田村の教使ハ幡あり古来の徳増の
氏族の者ハ高鴨を氏神曰根より繁る元ハ其社

る之す、醜越後守と云ハ妙口村剣の城主
川家の長良より其墓當村在所の田の中より
り如何故^ナ存^ト也^ト越後守門が家よりあれを祭
ると云

○ 公儀孝義録の字 孝行者政六

周布那石田村の百姓政六占田畑乃言四指六
石ありもちしり、継母につりて孝あり、繼

母は老て後眼を痛く目しおとある家の内の
歩行さふありあさりれ公堂お側にありて合
抱よんを看し食相え好ま乃歸く不調して去
免其お涼しく冬お暖に志あり廁乃通ひをも
りきおひて傳くり已も年老く起臥いとあや
ましおれと母のりふす、ふ走る免くり、ふ
川を心おあきて、我乃此老ぬるさ母をもみ

右
左
中
下

其後父乃世よりめや去く著せしも此の如き

今もやうく又多くありゆ記り述と母の存書

をわ急ありき持ふ已かく正しより海めや

りあふものうも筆のうにさくきつさ

村の月のうもよきよすひんさう母あしき也

のを不意に教へ諭せし布とりんを阿くも

るものも多く遠近乃人も感してさふよし領

